Kasugai City Philharmonic Orchestra

第15回 ～モーツァルト生誕250年記念～

# 春日井市交響楽団定期演奏会

2006年 9月 17日(日)

15時 開演

春日井市民会館

# ごあいさつ

ごあいさつ

春日井市交響楽団
名誉会長

春日井市長
伊　藤　　太

澄み渡った空が秋の訪れを感じさせる今日このごろ、春日井市交響楽団定期演奏会にご来場いただき誠にありがとうございます。春日井市交響楽団は、春日井市初のアマチュア・オーケストラとして平成２年に誕生以来、本市の音楽文化の振興に寄与すべく研鑽を重ねてまいりました。

恒例となりました定期演奏会は、皆様のご支援のお陰をもちまして、今回で15回目を迎えることができました。

今回は、ソリストとしてナポリ・ピアノ楽派の俊英、ジァンルーカ・ルイージ氏が出演されます。指揮者の吉住典洋氏のもと、ジァンルーカ・ルイージ氏の澄明感あるピアノ演奏と管弦楽が織りなす絶妙のハーモニーは、きっと観客の皆様を魅了するものと思います。

このような演奏会を通じてこれからも市民の皆様がクラシック音楽に親しむ機会をご提供できますよう努めてまいりますので、皆様方のさらなるご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

それでは、今日のこのひとときを心ゆくまでお楽しみください。

ごあいさつ

春日井市交響楽団
会長

中部大学 学監
三　浦　昌　夫

春日井市民のオーケストラ「春日井市交響楽団」の第１５回定期演奏会にようこそおいで下さいました。今年はモーツァルト生誕250年の記念の年です。今回は、ソリストにナポリからジァンルーカ・ルイージさんをお迎えして、モーツァルトの最後のピアノ協奏曲を協演していただきます。ルイージさんは、ナポリ・ピアノ奏法の名手で、これまでにない美しいモーツァルトを聴くことができるでしょう。また、モーツァルトの歌劇《コシ・ファン・トゥッテ》の序曲にも、モーツァルトの上質なユーモアにあふれています。因みに、この歌劇の舞台はナポリです。

そして、シベリウスの「交響曲第２番」です。大きな編成による長大な曲です。指揮者の吉住典洋さんの格調高い音楽作りと春日井市交響楽団のメンバーの熱演で、この曲の素晴らしさを十二分にお楽しみ下さい。

では、最後までごゆっくりお聴き下さい。

# プログラム
## *Program*

**ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756−1791）作曲**
Wolfgang Amadeus Mozart

### 「コシ・ファン・トゥッテ」序曲 KV588
Ouvertüre zur Oper
Così Fan Tutte KV588

### ピアノ協奏曲 第27番 変ロ長調 KV595
Konzert für klavier und Orchester Nr.27 B-dur KV595

第１楽章　Allegro　：快活に速く
第２楽章　Larghetto　：ラルゴよりやや速く
第３楽章　Allegro　：快活に速く

《休　憩》 *Intermission*

**シベリウス（1865−1957）作曲**
Jean Sibelius

### 交響曲 第2番 ニ長調 作品43
Sinfonie Nr. 2 D-dur Op.43

第１楽章　Allegretto　：快活にやや速く
第２楽章　Tepmpo andante,ma rubato　：ほどゆくゆっくりと、しかし速さを自由に加減して
第３楽章　Vivacissimo　：ごく活発に
第４楽章　Allegro moderato　：ほどよく速く

ピアノ独奏　ジァンルーカ・ルイージ
指　　揮　吉住　典洋
演　　奏　春日井市交響楽団

# プロフィール

ピアノ独奏
**ジャンルーカ・ルイージ**
*Gianluca Luisi*

正統的なナポリ・ピアノ楽派の後継者で、心と技巧と即興性を合わせ持つ天才的ピアニスト。1970年南イタリアのペスカラ生まれ。６歳からピアノを始めた。1991年にペーザロのロッシーニ音楽院でフランコ・スカラに師事して、優秀賞のデプロマを収得。その後、ラザール・ベルマンやイエルク・デムスの教えを受ける。現在も、ナポリで巨匠アルド・チッコリーニに助言を受けている。イタリアの多くの都市で演奏会を開き、ドイツ・ツアーでは、彼の新鮮なバッハ演奏が批評家と大衆の双方から絶賛された。各地のコンクールでも優勝を重ね、特にモーツァルトの最高の演奏者として「モーツァルト賞」(アクイラ市)を、また、「音楽都市賞」(ローマ市)を受ける。現在は、演奏活動とともに、イモラ音楽院で後進に指導に当たっている。2007年２月には、ニューヨークのカーネギーホールでのデビューがひかえている。

指　　揮
**吉 住 典 洋**
*Norihiro Yoshizumi*

愛媛県今治市生まれ。大学在学中より指揮活動を開始。名古屋二期会、中川良平のTokyo Bach－Bandなど数々のオペラ、ミュージカル等のアシスタントを務める。1999年、名古屋市文化振興事業財団主催「かるめん・じょーんず」（原作 G.Bizet：Carmen）の公演中に急遽指揮を命ぜられピット・デビュー、好評を得た。以後、「ヘンゼルとグレーテル」「フィガロの結婚」「オペラを作ろう『小さな煙突掃除屋さん』」などの作品を指揮する。2005年から劇団四季「オペラ座の怪人」ロングラン公演に参加。オーケストラではセントラル愛知交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団に出演するなど東海地方を中心に活躍している。

愛知県芸術大学管打楽器コース卒業、研究生を経て同大学大学院音楽研究科終了、よんでん文化振興財団奨学生。現在同大学非常勤講師。

オーケストラ　**春日井市交響楽団**　*Kasugai City Philharmonic Orchestra*

市民オケである春日井市交響楽団は、ベートーヴェンの「第九交響曲」の演奏会を春日井でも開きたいという市民の要請から生まれました。それを受けて、「市民が演奏し・市民が聴く、春日井市民のオーケストラ」として、市内の音楽愛好家を中心に、1990年（平成２年）11月に創立されました。愛称『カポ』（KAPO）は英字名称「KASUGAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA」の頭文字をとったもので、イタリア語の「カポ」（capo　頭・先頭に立つ者）の思いもあります。毎年、７月の定期演奏会と12月の「春日井市民第九演奏会」を中心に、数多くのオーケストラ活動を行っています。団員は、会社員・公務員・教員・医師・主婦・学生・自営業者などからなる60名。私たちにとって最大の喜びは、一人でも多くのみなさまに演奏会においでいただき、クラシック音楽が好きになっていただくことです。そのために、「春日井で名曲の名演奏を」と心がけています。また、「春日井の開かれた音楽の窓」となって国の内外の最高の音楽家との共演にも努めています。これからも、さらに、市民のみなさまに親しまれ、愛されるカポとして、市民音楽活動をつづけて参ります。温かいご支援をお願いいたします。

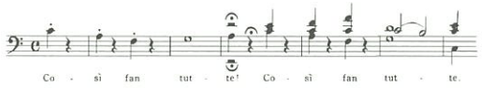
# 曲目解説

**今年は、モーツァルト生誕２５０年の記念の年です。**
**モーツァルトの生地ザルツブルクでは、彼のオペラの全作品が上演されるなど、**
**世界中でモーツァルトに関する演奏会や講演会や研究会や出版事業などが進められています。**
**このお祭りは、彼の亡くなった日の12月5日まで盛大につづけられることでしょう。**
**でも、なぜ、これほどまでにモーツァルトが誉め称えられるのでしょうか。**
**それは、彼の音楽には私たち人間の感情と行動のすべてがあるからです。**
**悲しみ・喜び・恐れ・憎しみ・甘え・さげすみ・復讐・尊敬・裏切り・からかい…などなどです。**

### 歌劇《コシ・ファン・トゥッテ》序曲 K.588

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト
(1756-1791)作曲

モーツァルトのもっとも滑稽な歌劇《コシ・ファン・トゥッテ》(1790年初演)にも、この「感情のカタログ」はあります。この変わった題名は、「(きれいな)女はみんな(トゥッテ：女性の複数)こう(コシ)した(ファン)(浮気)もの」と訳されますが、歌劇《フィガロの結婚》(1786年初演)で歌われたバジリオのこの台詞にふと耳をとめた皇帝が、「これは面白い。この題でオペラを書くように」と台本作者のダ・ポンテとモーツァルトに命じたと言われていたからです。物語は、ナポリで実際に起きた恋のもつれを描いたもの。ナポリの美しい姉妹に、それぞれ恋をした二人の若者がいました。彼らのあまりな熱愛振りをみた老哲学者が、「どれだけ愛していても女なんて浮気なものさ」とからかうので、怒った二人は、老哲学者に、彼らの愛の真実を賭けた賭をします。だが、結局は老哲学者の策略にのせられて、姉は変装した妹の恋人と結婚を決意し、妹は変装した姉の恋人と結婚を決意するのです。変装を解いた二人の若者は、浮気っぽい姉妹をさんざんにからかって幕となります。むろん、謹厳なベートーヴェンと女性たちはこのオペラが大嫌いですが、世の男性たちはますますモーツァルトが好きになるのです。序曲は、とても軽快な音楽で終始します。それはまるで、恋人たちの心代わりの早さを描いているようです。最後に、「コシ・ファン・トッテ」と劇中で歌われる主題を２度、大声で叫んで終わります。




### ピアノ協奏曲第27番　変ロ長調　K.595

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト
(1756-1791)作曲

死の年に書かれたモーツァルトの「最後のピアノ協奏曲」です。同じ年の作品である歌劇《魔笛》や《レクイエム》（死者のためのミサ曲）と同様、彼の音楽のあらゆる魅力がここにあると同時に、「モーツァルト晩年伝説」の生まれる基となった重く悲劇的な響きも感じさせます。特に、音楽の流れを一時停止させるシンコペーションや、突然現われる短調の響きがとても印象的です。『戴冠式』の名で知られる２６番のピアノ協奏曲が完成されたのは1788年２月でしたから、それから３年もたった1791年の３月５日に、この曲は、ウィーンの宮廷料理人イグナーツ・ヤーンのレストランでヨーゼフ・ベーアの予約演奏会で初演されました。いつものように、モーツァルトはピアノを弾きながら指揮をしましたが、これが彼が公開の場で演奏した最後になりました。第１楽章で、ピアノが左手で変ロ長調の「ド」を弾きながら弦楽器と一緒に登場するのは、指揮するために右手をあけておかなければならないためです。第２楽章と第３楽章がピアノ・ソロで始まるのも、指揮者を兼ねているピアニストがその楽章のテンポを決めるためです。また、現在残されている第１楽章と第３楽章のカデンツ（各々K.624とK.626a）は、初演のあとでモーツァルトが新しく書き直したものです。この協奏曲の第３楽章の主題は、みなさまもよくご存知のモーツァルトの歌曲「春への憧れ」(K.596)のメロディと同じものです。モーツァルトは、この歌をこの協奏曲を書いたすぐ後で書きました。音楽学者のケッヘルがつけた「作曲番号」(K)が、このピアノ協奏曲とつづき番号になっているのはそのためです。それで、この二つの作品はお互いに密接に結びついているので、この歌に、このピアノ協奏曲の謎を解く鍵があると私は思います。

寒い冬空の下、子供たちは歌います…。

「おいで、すてきな５月よ、木々をまた緑にしておくれ。そして小川のほとりにはスミレを咲かせておくれ。むろん、冬にだって色々な楽しみがあるよ。雪の中を走ったり、夜にはカードで小さな家を造ったり、鬼ごっこや罰ゲームをしたり、そりに乗って、広い野原にもすべっていける。ああ、さわやかな５月になればいいね。おいで、気持ちの良い５月よ、ぼくたちは、それが本当に欲しいのだ。」

実は、これは、子供の歌ではありません。死を覚悟した孤独なモーツァルトの深い嘆きの歌です。世間から理解されないままで、死んでいかなければならない彼は、寒い冬空にむかってひとり歌うのです…。

「おいで、すてきな５月よ、私を幸せにしておくれ。そして私のまわりに、友だちを一杯集めておくれ。むろん、いまだって、作曲という楽しみがあるよ。ピアノを弾いたり、指揮をしたり、旅行だってできるのだから。でも、ぼくは、もっとみんなに愛されたかった。みんなにぼくの音楽を分かってもらいたかった。お金も十分にあって、元気で幸せに暮らしたかった。もう冬のような暗い寒い人生はいやだ。ああ、幸せで明るい５月になればいい。ぼくは、それが本当に欲しいのだ。」

彼の死の年に書かれた最後のピアノ協奏曲が、「春への憧れ」で終わるのは決して偶然ではありません。「まもなく死ななければならない。死ぬことは厭わないけれども、まだ生きていて、すみれやナイチンゲールの声を楽しみたかった」と歌うこの歌と、そしてそれを主題とするこの協奏曲は、「生きることへの憧れと喜び」を私たちに伝える彼の遺言だと思うほかはありません。

［楽器編成］フルート１・オーボエ２・ファゴット２・ホルン２・弦楽５部で、ここでもクラリネットは使われていないのは、当時のクラリネットの音程と音色がまだ安定していなかったからだと思われます。

**第１楽章：**(快速に)
変ロ長調・4/4拍子・ソナタ形式

弦楽器が優雅な旋律を静かに歌い始めると、これに対して、管楽器が軍楽隊のような強い音を出して弦楽器を「通せん坊」します。この「通りゃんせ」のような無邪気な遊びは、たとえば「交響曲第４０番ト短調」の第４楽章で見られるよ